

---

# 転生者は主人公とヒロイン！？

ガンダムオタク

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

転生者は主人公とヒロイン！？

### 【Nコード】

N1701Y

### 【作者名】

ガンダムオタク

### 【あらすじ】

高校生になつた主人公悠は、とある謎の学園に入ったそこはオカルトと科学が融合して作られた試験召喚システムと天才科学者が発明したISがあつた一体主人公はどうなるのか・・・

## 高校生活の始まり

俺の名前は黒崎悠今年高校1年になったばかりだ  
もちろん小学校も中学校も平凡な学校だった。

しかし、今年の学校は少し変だ。いや少しどころではない  
普通ではない異常さがある。俺はその高校の前にいる  
そうその名前は

『文月隆盛学園』

前から思った事があった。それはこの学園の名前

確か前は文月学園だったはずだがどうして名前が変わってるんだ？  
そんな疑問を抱きながら高校の門をくぐった。そこに見えた光景は

『ほとんどが女じゃねえか！』

さすがに驚いた。この高校前は男子女子同じくらいの数だと聞いて  
いたが、

まさかここまで女子率が高いとは思ってもいなかった。

男子って俺だけなのか・・・すると誰かが俺の肩をたたいた

???

「お前悠じゃないか？」

だれかが俺に声を掛けてきた。どこかで聞き覚えのある声だ。  
うーん思い出せないだれだったかな

一夏

「俺だよ俺織村一夏だよ！」

あつ思い出した小学校が一緒の奴じゃないか懐かしいな。  
こいつは俺の元親友の織村一夏。小学校のころはずっと一緒に遊んでいた一人だ

悠

「一夏じゃねえか、懐かしいなおい」

一夏

「元気でやってるか、俺はずっとピンピンしてるぜ」

こんなところで親友と会えるとは思っ杖いなかった  
とりあえず二人でクラス表を見にいった

悠

「やったぜ一夏同じクラスじゃねえか」

一夏

「ああやっぱ俺たちって縁があるのかもな」

俺たちは興奮していた、元親友と会えたこと、同じクラスになった  
こと

いっぱいいいことがありすぎて嬉しさに満ち溢れた  
そこへもう一人誰かが俺たちに近付いてきた

???

「あれ？君つてもしかして悠じゃない？」

悠

「んお前はまさか」

そうそのまさか俺のもう一人の親友の・・・

明久

「久っしぶりだね悠小学校以来だっけ」

そう吉井明久だった

彼も俺の親友で小4まで明久、小5から小6まで一夏と一緒にいた俺は転校して友達が少なかったが、こいつらだけはずっと友達でいたかった

こんな2人に出会えた俺は幸せすぎるのかもしれない、神様に感謝感謝

一夏

「そいつはいったい誰だ」

悠

「ああ紹介するよこいつは吉井明久んでこいつは織村一夏だ」

明久

「よろしく一夏」

一夏

「俺こそよろしく」

さて自己紹介も終わりクラス表を再び見た見事に明久も一緒だった

明久

「やった2人と同じクラスだ」

悠

「やったぜこれでしゃべれる仲間が増えたな」

そんなこんなで俺たちはクラスへ行った

不安や期待もあつたが不安が一気に増え始めた

明久

「ねえ悠このクラス僕たち以外は女子だけなの？」

そう大半が女子ばかりだ、男子は9対1の割合で少ない

それとは別に1人だけ雰囲気がおかしいやつがいた

俺の隣にいるんだけどそいつなぜかセーラー服を着ている

一夏

「なあ明久なんでお前セーラー服なんだ？」

明久

「ああこれね家にこれしかなかったからさ」

お前は相変わらず阿呆のようだね、全く変わってねえじゃねえか  
小学校の時もテストで0に近い点ばっかだし

ふう、でもこいつはこいつでいいところがあるから気にしないでおう

???

「おい貴様ら、チャイムの音が聞こえなかったか？さっさと席につ  
けバカ者どもが」

いきなり大声で怒鳴られた、でも女の声だった

不思議とその声もどこかで聞いたことある声だった

次の瞬間女子が騒ぎ出した

『キヤーーーーーーあれ千冬様だわ』

『お姉さま、こっちむいてーーーー』

千冬？どっかで聞いたことあるようないなような  
あっ思い出した一夏の姉貴じゃねえか

千冬

「がやがや騒ぐなバカども、さつさと座れ」

うざそうな顔をしている、それも無理はない  
いきなりギヤーギヤー騒がれたのだからうざがるのは当然だろう

『キヤーーーーーもつと叱ってーーーー』

『私にも叱ってーーーー』

こいつらはバカなのかそれともMですか？

全く意味わかんねえなこの学園は  
いつもこんな感じじゃ生きてる気がしねえわ

千冬

「その男子どもさつさと座れ」

「くくくへえい」「」

そんな感じで今日は始まった自己紹介は次の話で……

## このクラスの連中と悠の夢

そんなこんなで俺たちは席に着いた

さっそく自己紹介に移るみたいだがめんどいな

なんて言えばいいのかまつたくわかんねえとりあえず

適当に自分の名前を言えばいいか

千冬

「でわさっそく自己紹介に入ってもらおう、でわ始めてくれ」

この場を無視して切り抜けようと思ったが気になる奴が数名いた  
それを注目して聞いていた

一夏

「織村一夏だ、よろしくな」

まあ普通の自己紹介だな、それ以上でもそれ以下でもない  
ただの自己紹介だ。俺もこんな感じで紹介するか  
次の奴はと……

秀吉

「木下秀吉じゃ、よろしくたのむ」

ん？まてまて奴は女のはず、なんで男の服を着てるんだ  
疑問が多すぎて自分の脳じゃ処理しきれねえ

『あのこって女の子なのになんで男の子の服を着てるのかしら』  
『そっよねあの子女の子なのに』

クラスでもこんな声が聞こえてくる。当然と言えば当然だが  
まあ男ということにしておこう  
次は……て俺じゃねえかなんて言えば

千冬

「どうした黒崎、具合でも悪いのか？」

悠

「い、いえいえ少し緊張してて」

あわててこんなことを言ってしまった、柄でもねえのに  
まあとりあえず言っておくか

悠

「俺は黒崎悠だよろしく、特に何も無いんで」

なんか変な自己紹介になっちまったな、最悪じゃねえか  
とりあえず落ち着いて続きを聞くか……

雄二

「坂本雄二だ、よろしくたのむ」

なんかやんちゃそうだな、こいつにかかわるとろくでもねえことに  
なりそうだ

とりあえず様子を見て関わるとしよう。

次は……

篝

「篠ノ之篝だよろしくたのむ」

さつきからたのむとかいうやつ多いな、でもこいつどっかで見たことあるような、まあ気のせいしか知ってたら知ってたで声かけてくるだろうし彼女も様子を見ておこう。次は・・・

美波

「シマダミナミデス、ヨロシク」

彼女の言葉なんか変だな、しかも漢字間違ってるしぶぶかわいいのでも

なぜだろうか、日本語もなんか変だしまあ説明とか入れてくれるだろうな

すると先生が・・・

千冬

「この島田はドイツからの帰国子女だ。まだわからないことも多いと思うのでみんなで仲良くしてやってくれ」

なるほど、そういうことかなかなかかわいいし気にかけるのも一理あるな

さてさて次は・・・

セシリア

「セシリアオルコットです、日本にはあまり慣れてないのでいろいろと教えて暮れるとうれしいです」

さっきの島田と違って日本語がぺらぺらじゃないか

しかもなんかの情報によると代表候補制だとか

それってなんだ？俺にはよくわからねえまあいいや次は・・・

土屋

「土屋康太だ、よろしくたのむ趣味はどうさ・・・なにもない、それととうちよ・・・なにもない・・・以上だ」

なんかおかしいキーワードが出たような出なかったような・・・まあいいや

ガタッ

なんかあいつから落ちたような気がするカメラか？てかそのカメラ見て島田の表情が変わってるんだが、何か変なものでも映っていたのだろうか？

まあいいやさて次はと・・・

明久

「どうも吉井明久ですよろしく願いします」

周りから見たら明らかにバカとしか言えない  
なんせ制服ではなくセーラー服を着てるのだから  
あんな変たいそうそういないぞ、やはり先生が話しかけた

千冬

「吉井この前渡した制服はどうした？」

明久

「すいません今探してるんで明日からは着てこれまーす」  
バチンッ

明久が本でたたかれた

千冬

「このバカ者っ・・・まあいい席につけ」

てな感じでコンだけ紹介した。他の奴にはあんまり興味がなかった



俺の青春はどうなるのやら・・・

さて自己紹介も終わって今は休み時間だ何をするやら・・・

『ねえ君って女の子じゃないの？かわったこね』

『ねえドイツってどんなところだったの教えて教えて』

いろんな話が聞こえてくると1人の女子が大声をあげて言い出した

『ええ女子以外にISが使えるとは聞きましたが、まさかこんなひよろけた人達が乗れるなんて、正直がっかりですわ』

ほお聞きづ手ならない言葉が聞こえたな、この声はセシリアとかいうやつの声だなはつきりいい返してやるぜ

悠

「おいセシリアなんたらよくも言ってくれぬぜ、代表候補制だか何だか知らんがお前をたたきのめしてやる」

もちろん余裕の表情で言っつてやったさ

俺だつて男なんだ。いうときは言っつてやらんとずに乗るであろう

『やめときなよ黒崎君、女子に勝てるわけないよ』

『そつだただでさえ女子は強いのに代表候補制と勝負するなんて』

こんな声が聞こえ始めた、正直あり得ない言葉だったが俺は気にしなかった

だつて俺男だしここで引くわけにわ行かねえ。バカにしたことを後悔させてやる

悠

「お前は強いみたいだけど、俺には勝てねえな」

セシリア

「あら、あなたみたいな人に負けるわけないじゃないの」

ここまで言つとわな、確実に仕留めてやるぜ

悠

「よしなら勝負だ、俺はいつでも言いお前が決める」

なんかひそひそ話で一夏と明久がしゃべりかけてきた

明久

「やめときなよ悠、彼女はほんとに強いんだからさ」

一夏

「とめるなよ明久、男にはやらないといけない戦いもある」

明久

「だけど・・・」

俺が明久の話を割り込んで入った

悠

「一夏の言つ通りだ。ここで引くわけにはいかねえ俺を行かせてくれ」

そんな言葉を放ちセシリアとの会話に戻した

セシリア

「じゃあ明日でどうかしら？私に勝てるんでしょ？」

明日だと、全くのつてもいねえのにいきなりかよ、しかし・・・

悠

「いいぜ上等だ叩きのめしたやる」

言ってしまったようだ俺たしたことがやっちゃまった

俺のいけない癖だこれからは気をつけよう

てなわけで俺は明日いきなり決闘をすることになった

そこでここは寮制なので寮に戻った

全く乗ったことのないISはたして俺に扱えるだろうか？

心配になって来た。すると・・・

???

「・・・たは・を・・・しますか？」

俺の部屋は一人用のはず、声が聞こえるわけ・・・

???

「あな・ちか・をほっしま・・・」

どンドン聞こえてくるもののまだかすかにしか聞こえない

???

「あなたは力を欲しますか？」

ようやく聞こえた、でも意味が全く分からない  
そして誰なのかも、俺も問ってみた

悠

「あんたは一体誰なんだ」

女神

「私は女神、あなたに力を貸すものです」

？全く意味がわからない

悠

「俺に力を貸す？何のために」

女神

「これから起こる災害のためにです」

これから起こる災害？何のことだろう

女神

「これから世界が混迷しているいろいろなことに直面するでしょう。その  
時にあなたの力が必要となるでしょう」

てかなんで俺？意味不明だ

悠

「なんでおれなんだ？いみわかんねえよっ」

女神

「私のきまぐれです」

は？冗談じゃねえそんなことで俺に頼むとかこいつはふざけてるのか？

とりあえず・・・いやまて俺に力を貸すってことは何でもしてくれるのだろうか？やってみる価値はありそうだ

悠

「女神さんよお俺に力を貸してくれ、俺は明日決闘なんだたのむ」

女神

「いいでしょうその代わりに私と契約してください」

悠

「契約？わかったなんでもするだから頼む」

女神

「わかりましたあなたに力を授けましょう・・・イメージして下さい  
い自分の操るISを」

いきなり俺の周りが光り出した

シュワンシュワンシュワン

どンドンその光が密着していく俺はどうなるんだ・・・

その時！おれの腕に腕輪らしきものがついた

女神

「それがあなたの力ですそしてもう一つあなた自身に力を与えましょう  
ようその力は今あなたがほしい力となるでしょう」

俺のほしい力？なんだろううSEEDとか純粋種のイノベーターかな

？うっ

シュワンシュワンシュワン

そして光がやんだ

女神

「私のできるのはここまでですわ御武運を祈ります」

そして女神は消えていった今のは何なのだろう夢なのかそれとも

まあいやはとりあえず寝よう明日になればすぐわかることさ

てなわけで俺は眠りについた

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1701y/>

---

転生者は主人公とヒロイン！？

2011年11月5日06時04分発行